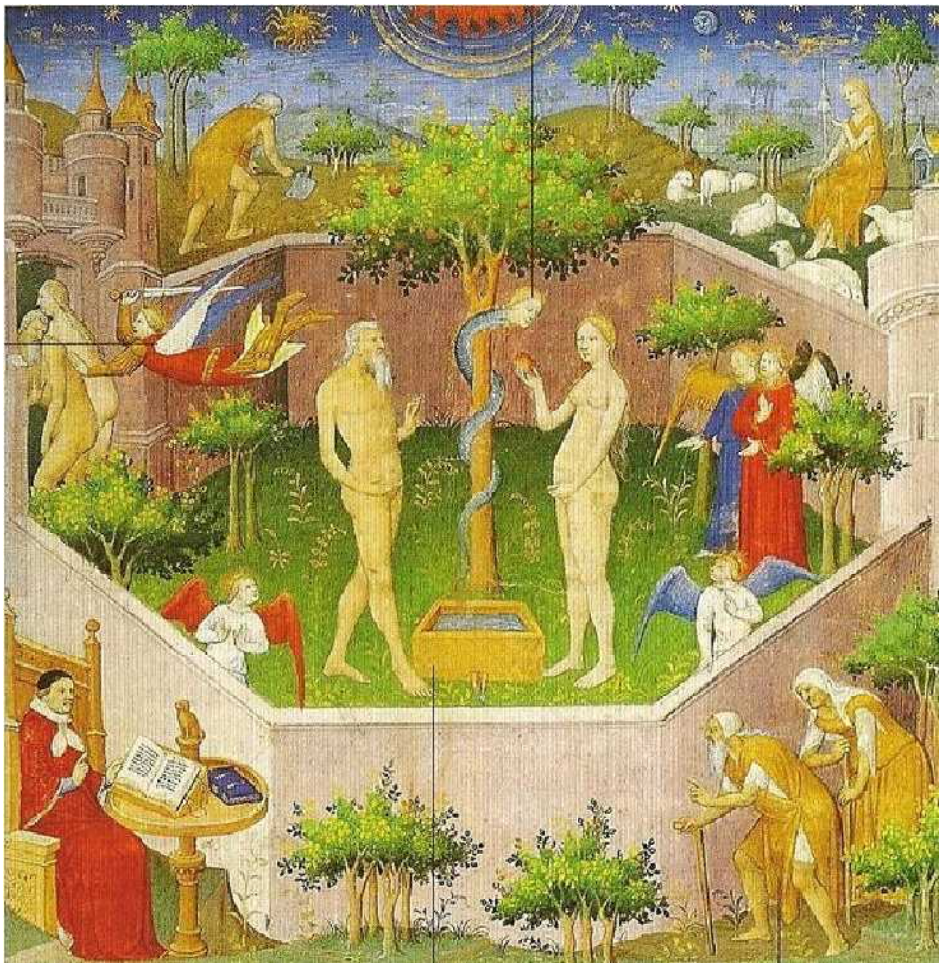
悲しみの子トリスタン



さて、《トリスタン》ですが、なぜ、主人公の名前が「トリスタン」なのかといえば、「父はカレオールの王メリオダス。母はマルケ王の妹ブランシュフルールです。父王メリオダスは敵から攻撃を受けているマルケ王を助けるために海を渡ってコンウォールへいきます。殊勲をあげたメリオダスはブランシュフルールを娶ってカレオールにもどります。メリオダスはトリスタンを宿しているブランシュフルールを残して再び戦いに出て戦死します。その知らせに驚いたブランシュフルールはトリスタンを生み落としてすぐに亡くなります。その子は両親がいないので「トリスタン」（悲しみの子）と名付けられました」というがのその理由です。可哀想です。悲劇の子供です。孤児のトリスタンは、祖父のマルケ王のもとで育てられます。王は養育係に勇者クルヴェナールをつけ、トリスタンに文武両道を学ばせます。戦いにもすぐれ、竪琴にも才能をしめしました。アイルランドが攻めてきたときに敵国の勇士モロルトと一騎打ちをして勝ちコンウォールを救います。そのときモロルト

の毒を塗った剣で傷つきます。治(なお)るあてのない瀕死のトリスタンは舟に乗せられて大海へ流されます。物語はここから始まります。物語も素晴らしいですが、それを歌うワーグナーの音楽も魅力的です。

原作の物語は、中世に宮廷詩人たちが広く語り伝えた恋愛物語です。しかし、ワーグナーの楽劇《トリスタンとイゾルデ》では、古くからの言い伝えの物語を、かなり、自分の創作で自由に変えています。それで、純愛物語として、ずっと、よくなりました。特に、トリスタンとイゾルデが飲む「媚薬」についてですが、これは古くからの物語では、創世記のアダムとイブの楽園物語に擬(なぞら)えて、「禁忌」(きんき:禁止された掟) によって封じられた、飲んではならない「禁断の魔薬」になっています。一方、ワーグナーの物語では、二人は魔薬を飲む前から愛し合っていたという設定になっています。なぜ、そうなのか？　これも、当初は、楽劇「トリスタンの謎」の一つとなっていました。いまでは、見事に解明されています。でも、少々、「ご都合主義」のプロットでもあります。

都築正道